光ため洩らさずにある青空のやうな若きなり夜飲み
ゐても　伊藤一彦

いっしょに焼酎を飲む若者の若さをたとえた上句の比喩が独特。ただの明るい青空ではない。明るさや輝きを内部に溜めるようなそんな青空のようだ、というのだ。夜であるにもかかわらず青空を連想させる、というところに、ひとかたならぬ好意が読める。

定植のセロリの苗が濃みどりの青年となる葉柄を武器に　髙辻郷子

近年では珍しい農業の歌である。苗だった幼年期から少年期、そして食用になる青年期へ。ただそのまま青年になるのではない。武器をとって闘って青年になる、そんなイメージがこの作者らしい。セロリの食べる部分は、蕗などと同じく葉柄である。

君おもふ午前四時なり夏の吐く絹にまかれてととの
ふひかり　岸並千珠子

夏の朝、曙から夜明けの微妙な光の変化を、糸を吐く蚕に比喩したアイディアに注目。「君おもふ」の背景をなすムードとして、古風な点がたぶんいいのである。

蓴菜は楕円の葉もて沼覆う赤く小さき花を隠して　西部稔

一面にジュンサイの葉を浮かせる夏の沼。「花を隠して」に、華やぎのない夏の沼水のとろんとした重さが読める。ジュンサイはスイレンに似た花をつける。花のサイズは小さく、花期は六月から八月だという。

短歌の現在

No.391　今月の15首を読む

佐佐木幸綱

先つ世の夢聞くごとく思はるるparfumeur（調香師）とふ職あることを　安田百合絵

現実には、化粧品メーカーや食品メーカーの需要が多くあって、調香師養成の専門学校は数多くある。中でもスイスの香料会社の調香学校は有名で、入学するには数百倍の競争率だという。ここはそうした現実をおくことで、あえて自分との距離のへだたりに光を当てている。

若きよりともに働きものがたる酒席は丸く話くりかえす　安部修治

「丸く話くりかえす」が面白い。同心円を描くように、くり返し共通の話題をなぞり返している、といった意味だろう。体験を共有している仲間の酒席の空気を的確にとらえている。「若きよりともに働き」とあるから、同じ年に入社した者の飲み会だろう。

柿葺落「俊寛」を観る潮風によろよろと立つわが吉右衛門　大岩洋子

新装歌舞伎座の柿葺落（こけらおとし）をうたった一首。「潮風によろよろと立つ」は、絶海の孤島・鬼界ヶ島に流された俊寛である。いかにも吉右衛門ファンという結句が楽しい。

日本から渡って夏の花となれる紫陽花華麗に咲きたる館　中根猛

「紫陽花華麗に咲きたる館」は、「館」と呼ぶにふさわしいようなヨーロッパの郊外の豪邸を思い浮かべていいのだろう。ところを得て咲いている紫陽花の重量感・存在感が読める。アジサイの原種ガクアジサイは日本が原